平成 31 年 ほくぎん若手研究者助成金 研究実績報告書

<table>
<tr><td colspan="2">氏名</td><td>所属・職名</td><td>助成金額</td></tr>
<tr><td colspan="2">近藤龍彰</td><td>学術研究部教育学系・講師</td><td>250,000 円</td></tr>
<tr><td>研究課題名</td><td colspan="3">幼児期における「わからないと言わない」ことの認知メカニズム</td></tr>
<tr><td>研究の概要</td><td colspan="3">本研究は、幼児期（3歳～6歳）の子どもを対象に、「答えられない」質問を行った際に「わからない」と回答するのか、また回答しないとすればそれはなぜなのかについて、検討した。
通常、年齢が上がると認知能力が向上し，答えられない質問に対して「わからない」と回答することが多くなると予想される。しかし、私自身のこれまでの研究から、答えられない質問に対して「わからない」と回答するのは、年齢が上がるにつれてむしろ低下することが示されてきた。本研究では、この低下減少について、年齢が上がると（答えられない質問でも）「答えを推測する」という認知メカニズムが出現することで、「わからない」と言わなくなる、という仮説を立て、これを検証した。
それを調べるために、実験課題として、（1）「どちらか」を尋ねるクローズド質問（例：赤と青のコップに犬の人形を隠して、どちらに隠れているかを尋ねる）と、「何か」を尋ねるオープン質問（例：バクの絵を見せてこの動物の名前を答えてもらう）の質問形式の比較、（2）なぜ答えがわかるのかの理由の質問、（3）再度答えを確認する、という手続きを用いた。
予想としては、（1）クローズド質問は答えを予測しやすいので、年齢が上がるにつれて「わからない」回答が少なくなる（オープン質問は答えが推測できないので「わからない」と回答する）、（2）なぜ答えられない質問の答えがわかったのかの理由として、5 歳や 6 歳の子どもは「答えを推測した」ことに言及する、（3）答えられない質問の答えを確認すると、5 歳や 6 歳の子どもは自信がなくなり、答えを変更する行動を行う、の 3 点であった。</td></tr>
<tr><td>研究の成果</td><td colspan="3">本研究の結果、（1）答えられないクローズド質問では、3 歳・4 歳児群よりも 5 歳児群のほうが、「わからない」回答が少なくなる、（2）なぜ「答えられない」質問に答えられたのかの理由として、5 歳児群は「思う」や「考える」「適当」といった言及を行った、（3）再度答えを確認した際、5 歳児群のほうが、回答を変更したり、「たぶん」といった自信のなさをうかがわせる言及を行った、の 3 点が示され、いずれも予想通りの結果であった。上記の結果はいずれも、5 歳ごろに「推測する」認知メカニズムが出現することで、答えられない質問にも「わからない」回答を行わなくなっていくという仮説を支持していた。</td></tr>
<tr><td>研究成果発表状況</td><td colspan="3">【学会発表】
近藤龍彰. 幼児期にける「わからないと言わない」発達的変化－クローズド質問とオープン質問の比較－. 第 31 回日本発達心理学会（於 大阪国際会議場）. 2020 年 3 月.</td></tr>
<tr><td rowspan="2">経費の執行状況</td><td>区分</td><td>執行額（円）</td><td>備考</td></tr>
<tr><td>物品費
謝金</td><td>228,400 円
21,600 円</td><td></td></tr>
</table>